

トビウオ通信 (H21 第 8 号)

(本誌はホームページでもご覧いただけます。ホームページにはバックナンバーもあります。)
<http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> (TEL 0855-22-1720)

《マアジ新規加入量調査結果速報》

島根県水産技術センターでは、日本海区水産研究所、西海区水産研究所および鳥取県水産試験場と共同で本年 5～7 月にマアジ幼魚の新規加入量調査を実施しましたので、今回はその結果をお知らせします。

結果の概要

- 鳥取県西部海域から対馬海峡までの山陰沿岸域において濃密にマアジ幼魚が採集されました。
- 今年のマアジ幼魚の加入量指数(来遊量の多さ)は、前年に引き続き高い数値となり、2003 年の調査開始以来最高の水準となりました。

マアジ幼魚の採集結果と分布状況

2009 年 5 月 19 日から 6 月 9 日にかけて図 1 に示す鳥取県西部から長崎県男女群島周辺の海域における合計 88 地点において、中層トロール網を用いてマアジ幼魚(2009 年生まれ)を対象とした漁獲調査を実施しました。その結果、尾叉長 2～4cm の平年より小型のものを主体に合計で 25,684 尾(1 曳網当りの平均採集尾数は 291 尾)のマアジ幼魚が採集されました。

マアジ幼魚の分布状況(図 1)を見ると、今年マアジ幼魚の適水温と考えられる水温 16～18℃(水深 50m)の水温帯が鳥取県沖合から対馬海峡にかけて広い範囲に分布し、調査を実施した各海域においてほぼ満遍なくマアジ幼魚が採集されました。

マアジ幼魚の分布量に水深 50mの水温分布を勘案して求めたマアジの加入量指数(来遊量の多さを表します)は、来遊量の多かった 2003 年を 1 とすると、今年は 1.26 となり、昨年(1.19)と同程度、2003 年の調査開始以来の最高水準となりました(図 2)。

また、島根県水産技術センターが月ごとに行った同様の調査結果(図 3)によると、山陰沖へのマアジ幼魚の加入のピークは昨年同様 6 月上旬にあったと考えられます。

今後のマアジ漁況との関係

マアジは主に東シナ海で生まれ、対馬暖流に乗り、日本海に漁獲対象として加入すると考えられています。また、マアジはイワシ類やサバ類と異なり、ある大きさ(7~8 cm)になると大きな移動はせず、瀬等の海底地形に依存して分布すると考えられています。

今年のマアジ幼魚の加入量指数(来遊量の多さ)は 2003 年の調査開始以来最高の数値でした。図 2 に境港におけるまき網 1 ヶ統あたりの当歳魚漁獲尾数と加入量指数の関係を示しました。同図に示したように加入量指数(来遊量の多さ)が高ければ、山陰沖でマアジ幼魚(2009 年生まれ)が多く漁獲されると考えられます。また、島根県沖では 6 月下旬以降定着すると考えられるサイズ(7~9 cm)のマアジがまき網や定置網で多く漁獲されています。これらのことから多くのマアジが日本海に流入し、山陰沖に広く加入・定着していると考えられ、今後の漁獲が期待されます。

しかし、マアジは小型魚のうちに獲るより、一年後に成長したものを獲る方が利用価値は高まります。また、小型魚を獲りすぎてしまうと来年以降の産卵親魚の減少につながり、今後の再生産に悪影響を及ぼすことが考えられます。平成21年3月31日には日本海西部・九州西海域マアジ(マサバ・マイワシ)資源回復計画が策定され、まき網漁業者を主体に小型魚を獲り控える取り組みが始まりました。山陰沿岸域では2年続けてマアジ幼魚の加入量が多い状態が続きました。この好条件を活かし、こうした取り組みによりマアジの資源が回復することが期待されます。

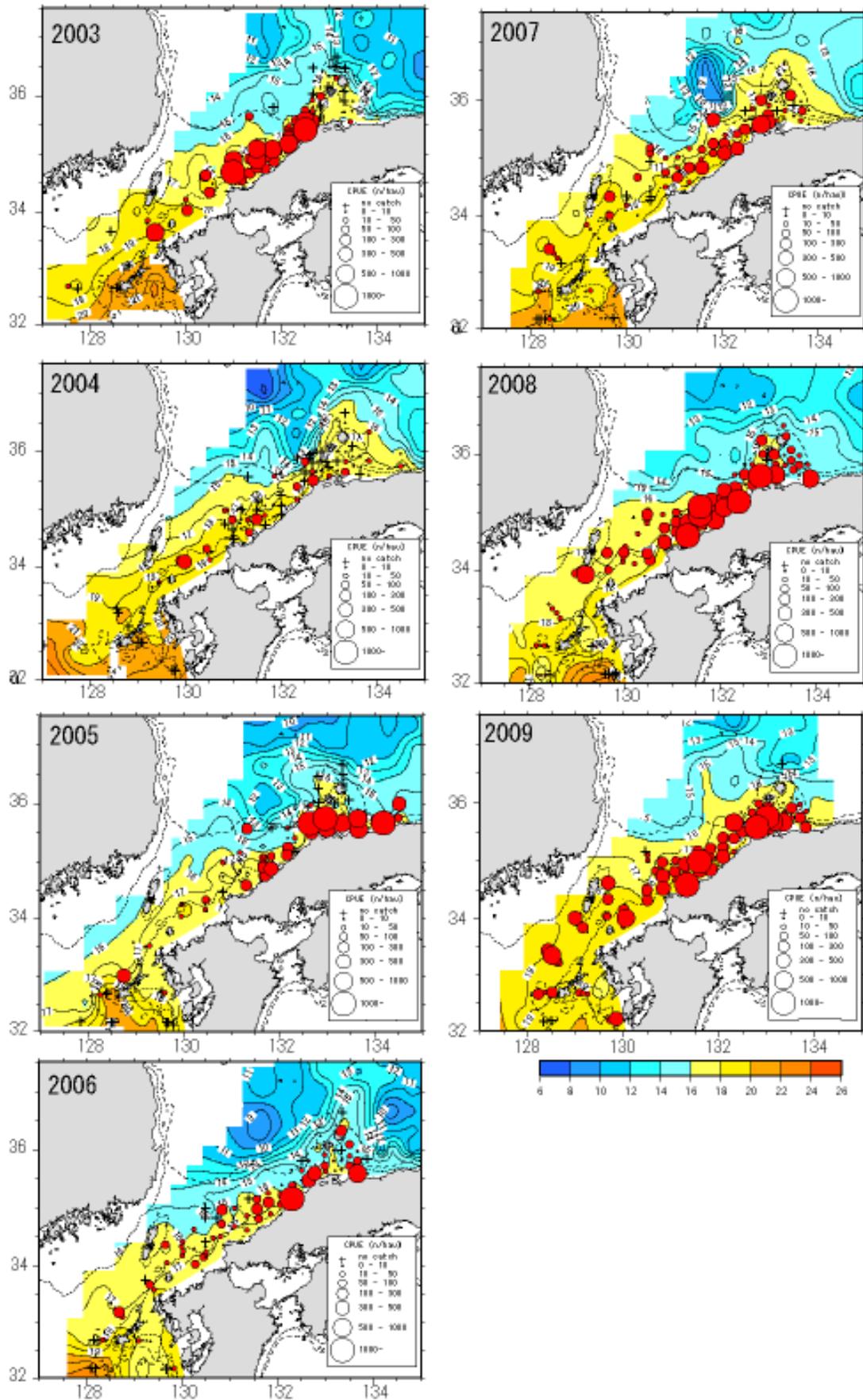


図1 中層トロール網調査における2003年～2009年のマアジ幼魚の採集結果
 (資料取りまとめ:鳥取県水産試験場)

円の大きさはマアジの採集量の多さを表し、+は採集されなかった点を表す。
 カラー部分は水深50mの水温分布を表す。

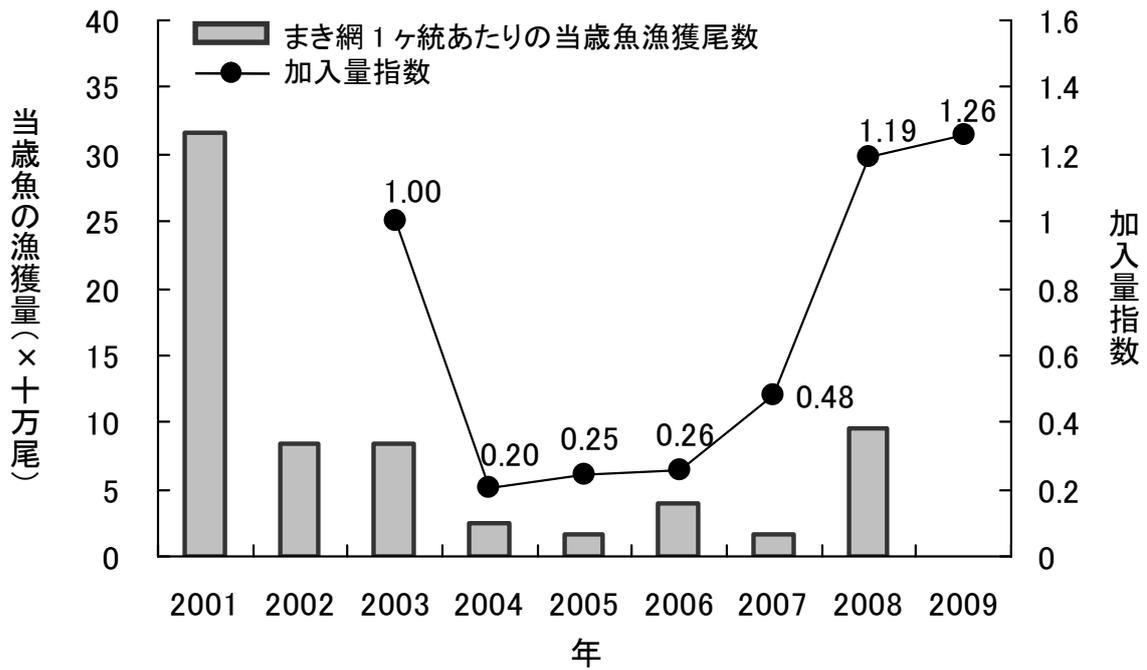


図2 マアジの加入量指数と境港におけるまき網1ヶ統あたりの当歳魚漁獲尾数の関係(資料取りまとめ:鳥取県水産試験場)

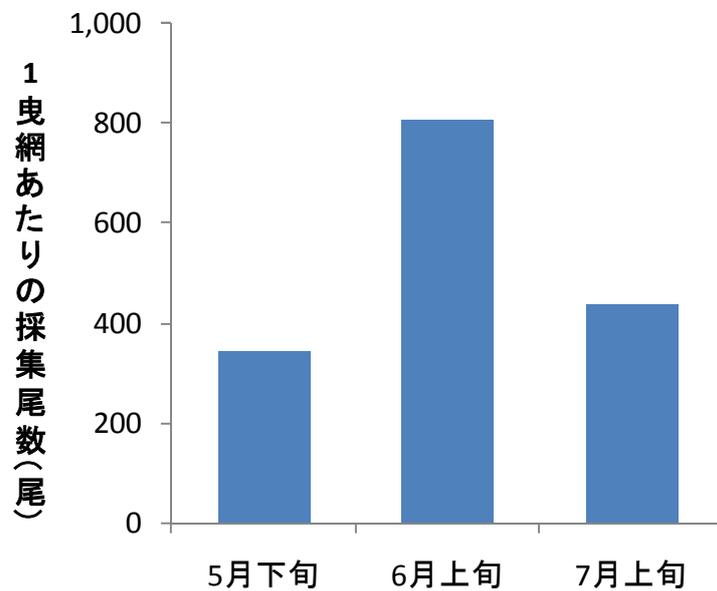


図3 中層トロール網によるマアジ幼魚の月別の採集尾数